# 人称と活格類型

## ——上代日本語の代名詞体系の観点から——

John Whitman・柳田優子

キーワード: 活格，能格，名詞階層，接語代名詞，弱形代名詞，包括形と除外形

### 1 はじめに

上代日本語の代名詞体系に「ウチ・ソト」の対立として把握されてきた現象がいくつかある．たとえば，所有格助詞「ガ」が人称代名詞，[+human] の固有名詞などより「ウチ」的な名詞句に付与されるのに対して，「ノ」は指示代名詞また [−human] の一般名詞など，より「ソト」的な名詞句に付与される（大野（1977）参照）．ところが，8 世紀の代名詞体系における「ウチ・ソト」の対立を現代日本語と厳密に比較してみると，著しい違いがある．現代日本語の代名詞体系は談話参加者（discourse participants）の視点に敏感で，話し手･聞き手･他者（other）の，いわば三次元的なシステムであるほかに，3 人称の捉え方は話し手の視点により大きく左右される．類型論的に考えると，話し手と聞き手の役割を大きく区別し，3 人称を，話者の視点により「近称」(proximate) と「離却形」(obviative) に分ける，いわゆる direct/inverse システムとよく似ている．それに比べて，8 世紀の体系はほぼ完全に二次元的で，「名詞階層」(Nominal Hierarchy, Silverstein (1976)) に従い，より高い位置を占める 1・2 人称と 3 人称 [+human] を一括に扱うことが普通であった．従って 1 人称と 2 人称を区別する文法現象は見当たらない．この事実は格助詞の分布のみならず，指示代名詞体系にも見られる．現代語の「近・中・遠」の三次元的な体系に対して，上代語には「コ・ソ」といった二次元的な対立しか認められないのである．本稿では上代日本語の代名詞体系を概観し，「ウチ・ソト」の対立として捉えられて

きた現象を言語の類型的特徴として位置づけることを試みる．

消滅した言語の性質を理解しようとするとき，我々はその子孫である生存している言語をもとに捉えようとする．生きている話者がいないと非常につかみにくい「視点」のような言語現象を扱う場合は特にそうであろう．さらに，日本語の場合，古代語の資料が「読み下し」という，現代語の表記法に似せた媒体で読まれるので，現代語のレンズを通して解釈しようとする傾向がいっそう強くなる．8世紀中央方言の言語資料を代表する万葉集の一首を例として考えてみよう．

(1)　去年の春　い掘じて植ゑし　我がやどの　若木の梅は　花咲きにけり　(MY8 / 1423)

動詞「掘ず」(kozu，根こそぎ掘り取る) 以外，この歌の語彙はすべて現代語でも通じる．助詞「ノ」「ガ」「ハ」の用法も現代語と大きな違いがない．また，助動詞語尾「シ」，「ニ・ケリ」も受験勉強で得られる程度の理解でだいたいの意味がわかり，代表的な参考書の現代語訳 (2) で，歌の意味が漏れるところなく捉えられているように見える．

(2)　去年の春　掘り起こして植えた　わが家の庭の若木の梅は　花が咲いてきた．　(小島他 (1994: 295))

このように，8世紀の日本語が，いわば現代日本語の延長線で捉えられるという見方は，いくつかの点において，根本的にまちがっているというのが本稿の主張である．特に，「視点」により捉えられてきた言語現象に，上代日本語と現代日本語の間に重要な違いがあるという点に焦点を当てながら議論を進めていく．本稿の出発点は，上代日本語（厳密に言うと8世紀とそれ以前の中央方言）は，現代日本語と異なる言語類型に属するという仮説である．現代日本語は言語類型論的に考えると，「主格・対格類型」の代表的言語であるのに対して，8世紀の日本語は「活格類型」の特徴を多く示す分裂活格 (split active) 言語であったという柳田 (2005a, 2007)，Yanagida and Whitman (2009) の分析を紹介し，活格言語は「視点」が関与する言語現象をどう表現するかを考えながら8世紀日本語の特徴について考察する．例 (1) の原文表記と音韻表記を (3) に示す．



(3)　去年春　　伊許自而殖之　吾屋外之
kozo no paru *i-kozi*te uwe*si* wa ga yadwo no
若樹　　梅者　花咲尓家里
waka kwi no ume pa pana saki*nikeri*

この歌の文法を，まず，代名詞に焦点を当て検討してみる．この歌では代名詞が「吾」ひとつしかないが，原文は仮名表記ではないので，「ワ」(一人称) と読まれたか「ア」(同じ一人称) と読まれたかは確かでない．いずれにしても，その1人称代名詞は歌の音律上，一音節語に違いない．佐久間 (1936 / 1983) 以降，現代日本語には狭義の代名詞は存在しないという主張がある．佐久間は，たとえば，現代日本語の1人称代名詞「私」「あたし」「おれ」「ぼく」などに共通の「1人称形態素」はない，という事実を指摘した．指示・不定代名詞にしても「コ・ソ・ア・ド」という形態素はあるが，その形態素が単独の「代名詞」として現れることはない．一方，8世紀日本語には1人称「ワ・ア」，2人称「ナ」はすべて明確な「人称形態素」として談話参加者を指す役割を果たしていた．この一音節代名詞の特徴は助詞「ガ・ヲ」を伴い，常に動詞の直前に現れることから，動詞など主要部に付加する，いわゆる，「接語代名詞 (clitic pronoun)」の特徴を示すことも現代語と大きく異なっている．後述するように，明確な人称代名詞体系も，接語代名詞も活格言語の特徴である．

意味の面においては，「ア」と「ワ」の違いは，前者が聞手を含まない「除外形」(exclusive) であるのに対して，後者は聞手を含む「包括形」(inclusive) であるという指摘は村山 (1950) に遡る（松本 (2008) も参照）．(3) の例で「屋外」(やど，家の庭) は1人の個人ではなく話者を含む集団よって所有される為，代々の文学者が上の歌の「吾」を包括形の「ワ」と読んでいるのである．ここで注目したいのは，1人称の除外形，包括形の対立もまた，活格言語の著しい特徴である．

次に (3) に見られる助詞の「ノ」と「ガ」について述べる．上代語の「ノ」と「ガ」は所有格助詞であったが，名詞化された文・句では主語を表示する機能もあった．(3) で観察できるように，無生名詞の「去年」「若樹」の所有関係は「ノ」で表示されているが，人称代名詞「吾」は「ガ」で表示されている．8世紀の日本語には，「ガ」と「ノ」の分布に整然とした規則性があるこ

とが知られている．人称代名詞は「ガ」で，指示代名詞は「ノ」で表示するのが普通である．一般的には人間を表す定名詞句には「ガ」，無生物，非人間の不定名詞句には「ノ」が使われる．これは，(4) で示す「名詞階層」を反映する分布であり，階層の左へ行くほど「ガ」を取ることが義務的になる．

(4)　名詞階層 (Nominal Hierarchy) (Silverstein (1976))
1 人称代名詞＜2 人称代名詞＜3 人称代名詞＜有生 [+human] 定名詞＜有生 [+human] 不定名詞＜無生 [−human] 定名詞＜無生 [−human] 不定名詞

格表示が名詞階層を反映するのも活格言語の重要な特徴のひとつである．

最後に，(3) の歌の第 2 句の動詞 i-kozite を見てみる．現代日本語に接頭辞はほとんど存在しないが，8 世紀の日本語にはかなり豊富な接頭辞体系があった．そのなかで，意味・機能がまだ定かでないものもあり，動詞 i-kozi- の i- もその一つである．[1] しかし歌の原作者だった阿部広庭は（もちろん我々の手元に残っているのは写本なので確実にはわからないが）接頭辞＋動詞をわざわざ「伊・許自」と万葉仮名で書いたということは，彼にとって接頭辞の「イ」には重要な意味があったはずだ．本稿では，「イ」は動作動詞 (active verb) に接辞する接頭代名詞であると提案する．

以上，8 世紀日本語と現代日本語の形態的・統語的・意味的違いをいくつか見てきた．その違いをまとめてみると，8 世紀の日本語には (5) に示す特徴がある．

(5)　a.　整った人称代名詞体系
b.　接語代名詞
c.　包括形・除外形代名詞の対立
d.　名詞階層による格の対立

1.　坂元 (1998) は「イ」が「多数，頻回」を表す形態素であった可能性を指摘している．「多数，頻回」を表す形態素は類型論的には「複数行為動詞」を表す pluractional affix に対応し，「複数行為」を表す文では文脈や動詞の他動性により，動詞の複数行為（つまり「頻回」）のみならず，自動詞文では主語，他動詞文では補語の複数を表すこともある．Klimov (1977) は pluractionality も活格言語の特徴のひとつとしてあげている．しかし，柳田 (2007) で示した万葉集の「イ」の例をみると，「イ」が「複数，頻回」と関係しない文にも少なからず表れる．



e.　動詞に格表示される代名詞接辞

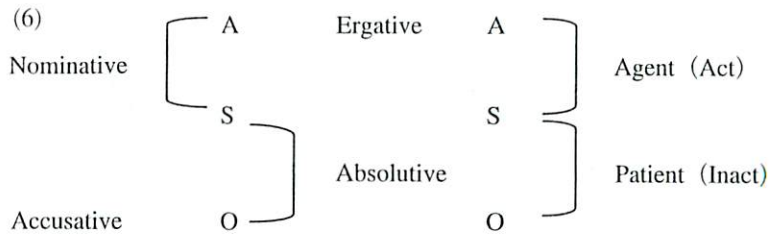
すでに指摘したように，(5a–e) はすべて活格言語に共通して見られる特徴である．以下，これらの特徴をさらに詳しく取り上げて，「ウチ・ソト」という概念によって捉えられてきた代名詞体系を類型学的に検討していく．まず上代日本語について述べる前に，活格言語とはどういう類型か，8 世紀の言語が活格言語であったという根拠はなにかについて取り上げてみたい．

## 2　活格類型

### 2.1　格システム

言語は類型的に対格型，能格型，そして Agent-Patient を基本とする活格型の大きく 3 つに分類される．言語類型論では，こういった分類を Alignment と呼び，文法・形態体系のもっとも基礎的な性質と考えられている．Dixon (1979, 1994) に従い，A を他動詞の主語，S を自動詞の主語，O を他動詞の目的語とし，(6) に対格言語，能格言語，活格言語の 3 種類の Alignment の違いを示す．

(6)




対格言語は A と S が形態的に主格標示され，目的語 O は対格標示を持つ．能格言語は S と O に絶対格が与えられ，他動詞の主語 A は能格標示される．一方，活格言語では他動詞，自動詞の対立ではなく，動詞に対して活性的参与者である Agent と不活性的参与者である Patient で異なる形態的システムをもつ．また，文の要素を主体・客体の関係ではなく，活性的な (active) 項と不活性的な (inactive) 項の間の関係と捉えた文法，形態的特徴をもち，名詞は活性（有性）類と不活性（無生）類に厳密に区別される．活格類型は，Klimov (1977) らのロシア内容的類型論者 (content-oriented typologists)

により体系的な研究が行われ，この活格類型は歴史的に主格・対格システムに先行する類型であるというのが彼らの見方である．従来，生成文法の枠組みでは Bittner and Hale (1996) などにより，活格言語は能格言語の一形態である ergative-active 言語として捉えられて来たが，本稿では Yanagida and Whitman (2009) に従い，活格言語は能格言語とは独立した類型であるという立場をとる．それは，能格言語と活格言語では能格 (Erg) の分布が先に示した Silverstein の名詞階層に対して逆向きになるという一般化を根拠とする．多くの能格言語では格システムが分裂する．たとえば，Thulung Rai（チベット—ビルマ語族）では代名詞は 1 人称，2 人称は主格（無表示），3 人称は能格 *-ka* で表れ，名詞句は能格で表示される．

(Allen (1975), cited by Lahaussois (2003))

(7) Thulung Rai (Lahaussois (2003))

a. Gui pe-pa .hal s.l-mu basi.
1pl eat-Npst.PRT dish wash-NOM.inf OBL
'We must wash the dishes.'

b. Gatsi mam-lai kr.m-.a l.-mu basi.
2d mother-DAT visit-PURP go-NOM.inf OBL
'You two must go visit mother.'

c. Gumimim-**ka** kam be-mri.
3p-ERG work do-3p/3s.PST
'They do work.'

d. I-lwak-**ka** i-mam-lai khl.i.
2POSS-y.sibling-ERG 2POSS-mother-DAT help.3s/ 3s
'Your younger sibling helps your mother.'

能格言語における分裂現象は，先に示した Silverstein の名詞句階層に厳密に従い，階層の低い名詞句ほど能格が表れ，代名詞など階層の高い名詞句では主格・対格が表れる．しかし活格言語は能格言語とは名詞句階層において明らかに異なる分裂パターンを示す．すなわち，階層の高い名詞句ほど活格が表れ，階層の低い名詞は主格表示（多くは無表示）される．

Lakota（北米，Siouan 語族）は活格型言語であり，行為者のうち 1 人称，2 人称のみ活格，3 人称には主格・対格が表れる．名詞句は形態的表示をもたない．



Lakota (Dahlstrom (1983))

(8) a. **Wa**- lowa. 'I sing.'
1sg.Ag-sing

b. **Ma**-haska.'I am tall.' 'I am tall.'
1sg.Pat-be tall

c. **Ma**-ya-gnaya-pi. 'You pl. tricked me.'
1sg.Pat-2Ag-trick-Pl

(9) a. Lowa-pi. 'They sing.'
sing-Pl

b. Haska-pi. They (anim.) are tall.'
be tall-Pl

c. **Ma**-gnaya-pi. 'They tricked me.'
1sg.Pat-trick-Pl

d. Wicha-**wa**-gnaya. 'I tricked them.'
anim.3Pl.Acc-1sgAG-trick

さらに，Mithun (1991) が指摘したように，主語の動作性 (agency) により分裂する言語には厳密な規則性がある．代名詞が分裂する言語では必ず 1 人称，2 人称が格表示され，3 人称は一般に無表示である．また，代名詞と普通名詞で分裂する言語では必ず代名詞が格表示され，人間と非人間で分裂する言語では人間が表示される．これはまさに活格が Silverstein (1976) の名詞階層の高いものに表れるという，能格とは逆向きの一般化である．活格類型は能格また対格とは独立した類型であるということを支持するものである．

### 2.2 自動詞の分裂 (Split Intransitivity)

#### 2.2.1 主要部表示 (Head Marking)

活格構造とは，動詞を他動詞，自動詞の対立ではなく，動作動詞と非動作動詞の対立を原理とする類型であり，活性的な (active) 項と不活性的な (inactive) 項を厳密に区別する文法的，形態的特徴をもっている．この形態的特徴の多くは主要部に表示される (head marking) 言語が多い．特に，

今日知られている多くの活格型の代表言語では，形態的分野において動作動詞 (active) と非動作動詞 (inactive) に対して (10)，(11) で示すようにそれぞれ対立する2つの代名詞接辞をもつ．

Guaraní (南米，Tupi-Guaraní 族; Mithun (1991))

(10) **A**-xá 'I go.' **Se**-rasí.' 'I am sick.'
**A**-puá 'I got up.' **Se**-ropehií. 'I am sleepy'
**A**-gwerú aína. 'I am bringing them now.'

Mawé: (南米，Tupi 族; Meira (2005))

(11) a. Maria **to**-to 'Maria goes.'
b. Maria **i**-kahu 'Maria is pretty.'

### 2.2.2 名詞句表示 (Dependent Marking)

活格言語の中には名詞句に形態的特徴を示す言語もある．たとえば，(12) で示す Lotha 語 (チベット-ビルマ語族) は活格言語に属し，動作自動詞と他動詞の主語は -na で標示され，状態動詞の主語は -co で標示される．

Lotha (Dahlstrom (1983))

(12) a. John-**na** firo ci echo cho.
John-Act dog det hit perf
'John hit the dog.'
b. Mpo-**na** oki na hapoi ci yi cho.
he-Act house from outside Det go Perf
'He went outside (from the house).'
c. Nkolo co a wopan ciag-**co** Wokka-e van cho.
long ago I family Det-Inact Wokka-Loc live Perf
'Long ago my family lived in Wokka.'

Lotha 語は動作動詞と非動作動詞 (一般には非能格と非対格自動詞) で分裂し，動作自動詞と他動詞主語 (Agent) は同じ標示をもち，非動作動詞の主語は他動詞目的語 (patient) と同じ標示をもつ．



### 2.2.3 非人称構文 (Impersonal Construction)

アメリカ原住民諸語は活格型をもつ言語が多く存在するが，Sapir (1917: 85) はアメリカ原住民語の非動作動詞 (inactive) は主語が他動詞の目的語として表れる——いわゆる，「他動詞的非人称構文 (transimpersonal construction (Haas (1941))」と分析できると提案している．たとえば，I sleep や I think などの非動作自動詞の主語は It sleeps me または It thinks to me (中世英語の me thinketh) など他動詞の目的語として表示される．アメリカ原住民諸語の自動詞の分裂はこの「他動詞的非人称構文」の再分析により発達したと言われている (Malchukov (2008) 参照)．さらに，パプア諸語の Usan 語では，ほとんどの経験動詞 (Malchukov がいう experiential verb や sleep などを含む) は strike や shoot などの意味をもつ助動詞をとり，目的語代名詞接辞が助動詞に接辞する．Reesink (1987: 139) はこれらの動詞は基本的に (13) で示すように経験主 (本来の目的語) が文頭主題位置に表れる以外他動詞と同じ構造であると述べている．

Usan (Reesink (1987: 139))

(13) Munon isig toar wa-r-a
man old sickness him-shoot-3sg.ds
'Old man is sick.'

Usan 語と系統的に近い Amele 語でも同様の他動詞的非人称構文がみられる．

Amele (Roberts (1987: 315))

(14) Ija wen te-na
1sg hunger 1sg.-3sg.A.Pres
'I am hungry.'

(14) に示すように，経験主は文頭の主題位置に表れ，経験主の人称に関わらず，動詞は常に3人称に一致する．Malchukov (2008) は天気などを表す「非人称構文」が「他動詞的非人称構文」と同じ構造をもつ言語があることを指摘している．

West Greenlandic (Fortescue (1984: 81))

(15) Anurliliup-paatigut
storm-indf.3sg.A>1pl.P
'We were caught by storm,' (It stormed us)

(15) の動詞に表れる接辞は3人称単数主語が1人称複数に対する行為を表す．Malchukov (2008) は活格言語において，自動詞分裂が他動詞非人称構文から発達したと思われる事実について詳しく述べている．3節では活格類型の自動詞分裂の特徴が上代日本語に存在することを示し，上代日本語の活格性について考察する．

## 3 上代語

Dixon は能格言語の多くは格システムが分裂し，その分裂には一般性があることを示した．その中で特に日本語に関係するのは，強形代名詞 (strong pronoun) と接語代名詞 (clitic pronoun) の分裂と主節，従属節の格システムの分裂である．上代語には強形代名詞と接語代名詞が存在し，主節は主格・対格型，従属節は活格システムが表れる (Yanagida (2005b)，柳田 (2007) 参照)．Yanagida and Whitman (2009) では上代語の従属節 (厳密にいうと，連体形，已然形，未然形の条件節と連用形節の一部分) はすべて名詞化，あるいは名詞化に起源があると主張している．[2] 本節では，名詞化の詳しい議論は省略し，従属節に見られる名詞句表示，動詞接辞の活格性について見ていく．

### 3.1 「ガ・ノ」

現代語では (16) に示すように他動詞と自動詞の主語は「ガ」で表示されるため「ガ」が主格表示であることは議論の余地がないと思われる．

2. 類型学的に従属節が名詞化である言語は，たとえば Tibetan (Delancy (1986))，Turkish (Givón (1991))，Ute (Givón (1988))，Cariban (Gildea (2000)) など数多く存在する．



(16) a. 太郎が本を買った．
b. 太郎が泣いている．
c. 庭に木が立っている．

上代語では連体形などの従属節にのみ，所有格「ガ，ノ」が主語表示として用いられる．今までの伝統文法では「ガ」と「ノ」の違いは主語または所有者要素の意味的違いに焦点が当てられ議論されてきた (野村 (1993) など)．その意味的違いは，類型的に上代語が活格型であることを示すものである．(4) で示す名詞階層のもっとも高い代名詞 (「ア，ナ」など) は「ガ」が義務的であり，「ノ」で表示されることはない．有生名詞は「ガ」で表れる頻度が高く，無生名詞は一部の固有名詞 (「日」など) を除き「ノ」で表示される．また，「ガ・ノ」が従属節の主語に付与される場合，その分布は動詞の意味とも関係し，一般に，動作動詞 (active verb) の主語 (A) は「ガ」で表示される．一方，非動作動詞 (non-active verb) の主語は「ノ」で表示されるかあるいは目的語と同様に無表示で表れる．[3] (17)-(19) に示すように名詞階層と「ガ」の分布は活格言語の一般的特性を反映している．

(17) a. 汝が (奈我) 来とおもへば (MY 4 / 528)
b. わが (和我) 来るまでに (MY 20 / 4408)
(18) a. 里長が (我) 課役Ø徴らば… (MY 16 / 3847)
b. さよひめの子が (何) 領布Ø振りし山の名 (MY 5 / 868)
c. めづらしき君が (我) 来まさば (MY 18 / 4050)
(19) a. 真木の (乃) 立つ荒山中 (MY 3 / 241)
b. 泊瀬の山は真木Ø立つ荒山道 (MY 1 / 45)

Dixon (1994) は自動詞の動作性によって格システムが分裂する言語を Split-S 言語，さらに，同じ自動詞でも主語の意志の有無により異なる格で

3. 状態動詞の経験者 (experiencer) は (i) で示すように「ガ」で表示され，他動詞の動作主語と同じ振るまいをする．
(i) この九月をわが背子が (之) 偲ひにせよと… (MY 3329)

表示される言語を Fluid-S 言語と呼んでいる.[4] Dixon の言う Split-S 言語および Fluid-S 言語はいずれも活格言語に対応する. (20) に見るように、上代日本語では「行く」の主語が人間で意志を表す時は「ガ」で表示され, 無生物の場合は無助詞か「ノ」で表示される.

(20) a. 君我　由久　道乃奈我弖
Kimi *ga* *yuk-u* miti *no* *nagate*　(MY 15 / 3724)
あなたが　行く　道 Gen 長い道のり
「あなたの行く長い道のり」

b. 明日香河　逝　湍乎　早見
Asuka-gapa Ø yuk-u se *wo* paya-*mi*　(MY 11 / 2713)
明日香川　行く　瀬を　早-MI
「明日香川の流れゆく瀬が早いように」

以上の例から,「ガ」が表れるか否かは主語の意志の有無と関係しているという点で上代日本語は, 分裂自動詞をもつ Fluid-S と呼ばれる活格言語であると言える.

大野 (1977) は,「ガ」と「ノ」の対立をウチ・ソトの対立と分析している. 人称代名詞である「ア・ワ・ナ・シ・タ」に「ガ」が付与されるのに対して, 指示代名詞コ・ソに「ノ」が付与されることを根拠に,「ガ」がより

4. Dixon (1994) は代名詞や固有名詞は普通名詞より, 動作性 (agentivity) が強く, 格分裂をする条件のひとつにあげている. また能格が動作性の強弱と関係し, 能格言語の中には非対格動詞でも動作性が強いと能格が現れる言語がある. 以下 Comrie (1978: 366) からの例を示す.

(Bats: Nakh)

(i) a. Txo　naizdrax　qitra.
we-ABS. to-the ground fell
'We fell to the ground (unintentionally).'

b. Atxo　naizdrax　qitra.
we-ERG to-the ground fell
'We fell to the ground (intentionally).'

(ia) は「落ちる」という動作が偶発的であり, (ib) は主語の意志による行為である. 前者では主語は絶対格, 後者では能格表示されている. このように同じ動詞が意味的に違う場合, 格の分裂が起こる活格システムを Dixon は Fluid S-System と呼んでいる.



「ウチ」的,「ノ」がより「ソト」的であるというのが大野の主張である. しかし野村 (1993) が指摘するように,「ガ・ノ」のウチ・ソト説に「論の出発点に矛盾を抱えている」. つまり, ウチ系列に属するはずの指示代名詞「コ」はほとんどの場合にソト系列の助詞とされる「ノ」が付き, 1・2 人称に比べてソト的であるはずの「タ」(誰) にウチ系列の「ガ」が付く (野村 (1993: 6)).「ノ・ガ」と代名詞の相互関係は, ウチ・ソトの対立ではなく, 上で示したように, 名詞階層によって支配される. 人間を指示する人称代名詞に「ガ」が付き, 非人間を指示するコ・ソに「ノ」が付くのである.

一般名詞に付く「ガ」と「ノ」の使い分けにも名詞階層の働きが見られる. 例えば, 名詞「君」には, すでに 8 世紀に聞き手指示の用法が発達していたが, 野村 (1993: 7) が指摘するように, 聞き手指示 (野村がいう「2 人称代用形式」) の場合に「君が」の形で現れ, 3 人称指示の場合に「君の」の形で現れる. 階層の高い 2 人称の意味を持つ「君」に「ガ」が付与されるのである. 同じように, (21) の例に現れる「をとめ」(乙女) はどちらも 3 人称であるが, 名詞階層に占める位置が異なる.

(21) a. 隠口の泊瀬少女が (我) 手に纏ける玉は乱れてありといわばやもく　(MY 3 / 424)

b. 筑紫なるにほふ児ゆゑに陸奥の可刀利少女の (乃) 結ひし紐解く　(MY 14 / 3427)

「隠口の泊瀬少女」に「ガ」が付き,「可刀利少女」に「ノ」が付くことはウチ・ソト説では説明できない. 後者は, 歌の語り手 (詩人) にとって, かつての恋愛相手なので, ウチ・ソト説に従えば,「ウチ的」で,「ガ」が付くことが予想されるのである. また, 中古以後の日本語に,「ノ」と「ガ」の間に尊卑の違いがあり,「ノ」のほうが敬意度が高いと言われているが, このような違いは (21) の 2 つの歌に見出されない. 2 つの歌の最も著しい違いは,「隠口の泊瀬少女」は提題 (トピック) 節「隠口の泊瀬少女が (我) 手に纏ける玉は」の中に埋め込まれている為, 旧情報であり定名詞句である. それに対し,「可刀利少女」は不定名詞句である. 名詞階層 (4) を見ると, 定名詞句は不定名詞句より高い位置を占めている. (21) の「ガ」と「ノ」の使い分けは, 名詞階層による定名詞句と不定名詞句の違いを表している.

### 3.2 接頭辞 sa- と i-

上代語の接頭辞 sa- と i- の存在は広く知られているが，その機能については今までほとんど明らかにされていない．Yanagida and Whitman (2009) の上代歌謡の調査によると，この2つの接頭辞も「ガ」と同様に活格型をとる「名詞化」に特徴的に表れる．活格型言語では，名詞句のさまざまな文法的機能が動詞接辞として主要部表示 (Head Marking) される特徴がある．本節ではこうした類型学的見地から上代語の接頭辞 sa- と i- の機能について考えてみる．

#### 3.2.1 接頭辞 sa-

2節でみたように，活格類型の分裂自動詞が「他動詞的非人称構文」からの再分析に由来するという仮説が正しければ，上代語の非動作動詞にも非人称構文が存在しても不思議ではない．類型論的に非人称構文は「寝る」などの経験動詞や天気を表す動詞にもっとも広く使われる (2.2.3 節参照)．sa- の分布をみると経験動詞の「寝る」や天気に関わる「夜ふける」「曇る」などにもっとも多く表れる．

接頭辞 sa- (動詞接頭辞として約 43 例)

(22) a. さ-夜ふけぬとに (MY 19 / 4163)
b. さ-曇り (MY 13 / 3310)
c. 玉くしげ開けて さ-寝るにし我 (MY 11 / 2678)

また sa- は「走る」「踊る」「渡る」「根はふ」「並べる」「曇る」「丹つらふ」などの自動詞に接辞する．sa- が接辞する動詞は自動詞で，主語は動作主としての意志や意図を含まないものに限られる．さらに，ほとんどの例で，動詞の主語は文頭に格なしで表れるか，動詞に後続して表れる．

(23) a. 吾家の里の川門には鮎子さ-走る君待ちがてに (MY 5 / 859)
b. 川の瀬に年魚子さ-走る鳥つ島 (MY 19 / 4156)
c. 湖にさ-根延ふ小管 (MY 11 / 2470)
d. さ-並べる鷹は無けむと (MY 17 / 4011)
e. さ-丹つらふわご大君 (MY 3 / 420)
f. たかべさ-渡り (MY 11 / 2804)



(22), (23) が示す特徴は類型論的に非人称構文に類似し，sa- は普遍的に非人称構文の主語の位置を占める3人称接語代名詞であると考えられる．sa- には「さ-ゆり」(MY 4088 4113, 4369)，「さ-えだ」(MY 386, 4177, 4207)「さ-衣」(MY 2866, 3394) など名詞接頭辞としての用法がある．仮名書きの / sa-goromo / (MY3394) でわかるように，sa- は次の子音の濁音化を起こす接頭辞である．sa- が3人称接語代名詞であれば，sa- は「中称」の指示代名詞 so や3人称代名詞 si と関連がある可能性がある．その場合，おそらく原形は *sa-N であり，-N は連濁をおこす同じ形態素，いわゆる所有格であり，sa- はその原形に所有格が含まれている3人称代名詞の所有格形と推測される．

#### 3.2.2 接頭辞 i-

1節で述べたように，上代日本語の接頭辞 i- についてもいくつかの仮説はあるが，現在まで，ほとんどその機能が明らかになっていない．i- も「ガ」の分布に近く，名詞化である従属節に表れ，主文終止形には表れない．sa- が非動作主語をとる動詞に限られるのに対して，i- は (24) に示すように動作主語をとる「行く」などの自動詞と他動詞に多く接辞している．

接頭辞 i- (73 例) (柳田 (2007) 参照)

(24) a. 奈良の京の佐保川にい行き至りて (MY 1 / 79)
b. 久米の若子がい触れけむ磯の草根 (MY 3 / 435)

sa- が接辞する動詞の主語が「ガ」で表示される例はないが，i- は「ガ」で表示される主語と共起する例が少なからずある．活格言語において，接頭辞には項である名詞句のなんらかの文法機能が反映されている．こうした観点から sa- と i- の分布を観察すると，sa- は非動作主語 (S) を，i- は動作主語 (A) を動詞に表示する (cross-referencing) 機能があるように考えられる．[5]

5. これに関連して，板橋 (1998) はアイヌ語の不定人称接頭代名詞 i- と上代日本語の i- との関連性を指摘し，アイヌ語では i- が3人称所有格接頭辞に起源があると提案している．アイヌ語と上代日本語との関連は不明であり，接頭辞などの語彙の類似性だけで2つの言語の同源性を主張するのは問題があるように思われるが，一考に値する観察である．

本節では，8世紀日本語の所有格「ガ・ノ」また接頭辞 sa- と i- に活格型言語の特徴が観察されることを示した．4節では，こうした類型学的特徴をふまえて，上代日本語の代名詞体系について考察する．

## 4　上代日本語の人称代名詞

### 4.1　三分類代名詞体系

佐久間 (1936 / 1983) 以降，現代日本語には人称代名詞がないという仮説は理論的枠組みを問わず，広く取り入れられている（三上 (1955 / 1972)，鈴木 (1973)，久野 (1978)，Hoji (1990)，廣瀬 (1997) など参照）．仮説の根拠を整理すると，およそ次のようになる．

(25)　a.　人称代名詞に名詞と見るべきものが多い（佐久間 (1936 / 1983: 5–6)）．

b.　コ・ソ・ア・ドに単独の名詞用法がない（佐久間 (1936 / 1983: 7–8)）．

c.　人称代名詞における「人称」が定義しにくい（三上 (1955 / 1972: 171–172)）．

d.　自称・対称の場合「わたくし・あなた」より職業名（部長，先生など）や親戚名（お姉さん，お父さん）を多く使う（鈴木 (1973)）．

e.　3人称代名詞はなく，「他称」の役割を果たす語は指示詞か一般名詞である（佐久間 (1936 / 1983: 22)）．3人称代名詞といわれる「彼」は特に直指的 (deictic) な性質が強く，代名詞ではない (Hoji (1990))．

f.　公的自己を表す固有のことばは現代日本語には存在しない（しかし私的自己を表す「自分」という表現はある）（廣瀬 (1997: 11–20)）．

上の (25a–e) において8世紀の日本語は現代日本語と著しく異なっている．まず (25a) に関して，現代語の1・2人称代名詞とされる「私」「僕」「君」などは語源的に名詞であるだけではなく，文法的にも一般名詞と違いを示さないことが多い．[6] 例えば，(26a) に示すように「私」や「僕」は一般名詞と同じように指示詞や制限的形容詞によって修飾され，(26b) に示すように一般名詞と並列構造にも現れる．



(26)　a.　このみっともない私に励ましの声をかけてくれた．

b.　女房と俺とでカラオケに行った．

これに対して，8世紀の日本語には名詞とは明らかに異なる代名詞体系があった．まず表 (27) に示す分布を見てみる (Yanagida (2005b) 参照)．

(27)

| 後続する助詞 | | 接語代名詞 clitic pronouns ア・ワ・ナ・シ | 弱形代名詞 weak pronouns コ・ソ・(カ) | 強形代名詞 語幹＋レ「われ」など |
|---|---|---|---|---|
| 格助詞 | ガ | ＋ | －／＋(「ソ」のみ) | － |
| | ヲ | ＋ | ＋ | ＋ |
| | ノ | － | ＋ | ＋ |
| | ニ | － | ＋ | ＋ |
| | ユ ヨリ | － | ＋ | ＋ |
| 副助詞 | シ | － | ＋ | ＋ |
| 係助詞 | ハ | ＋ | ＋ | ＋ |
| | モ | － | ＋ | |
| | コソ ソ／ゾ ナモ カ・ヤ | － | － | ＋ |

6.　しかし，長谷川 (2007) では現代日本語の1人称の省略がそれ以外の名詞の省略とは明らかに異なる制約を受けることに注目し，1人称は構造的に語用論機能をになう CP (= Mood) で照合されると提案している．

上代日本語の代名詞は3つのタイプに分類される．「ア・ワ・ナ・シ」などの1音節人称代名詞は，「ガ・ヲ」を伴って表れるが他の格助詞と共起しない．後述するように，これらの一音節人称代名詞は接語代名詞（clitic pronoun）の特徴を示す．1音節指示詞「コ・ソ」は1音節人称代名詞より，広い範囲に現れるが，フォーカスを伴う係助詞とは共起せず，いわゆる「弱形代名詞」(weak pronoun) の特徴をもつ．この2種類の代名詞に対して，代名詞接尾に「レ」が付加された「強形代名詞」(strong pronoun) には分布上制約がない．また，強形代名詞は「ガ」を伴って現れないという接語代名詞と異なる重要な特徴がある．

「接語代名詞」「弱形代名詞」「強形代名詞」という3分類はちょうど Cardinaletti and Starke (1999) が提案した代名詞の類型論的分類と一致する．ヨーロッパやアフリカの数多くの言語調査により，Cardinaletti and Starke は代名詞を大きく「強形代名詞」(strong pronouns) と「不完全代名詞」(deficient pronouns) に分類する．不完全代名詞はさらに弱形代名詞 (weak pronouns) と接語代名詞 (clitic pronouns) に分類される．彼らの分類によると強形代名詞がもっとも分布が広く，接語代名詞がもっとも分布が限られるという特徴がある．それは，表 (27) に見られるように，上代語代名詞体系の分布に対応する．以下に上代語の代名詞体系の3分類をもう少し詳しく見てみる．

［不完全代名詞 (deficient pronouns)］

(28)　a.　接語代名詞 (clitic pronoun) + ガ

知々波々袁　意伎弖夜奈何久
*Titi papa wo okite ya nagaku*
父母　を　置きてQ　長く
阿我和加礼南　(MY 5 / 891)
*a ga wakaremu.*
吾 が　分かれるだろう
「父と母を残して永久に私は分かれるのか」

b.　接語代名詞 + ヲ

那遠　岐弖　遠波 那志　那遠 岐弖　都麻波
*Na wo kite wo pa nasi na wo kite tuma pa*



あなたを置きて 男は なし　あなたを　置きて　夫は
那志　(古事記歌謡 5)
*nasi.*
なし
「あなたのほかに男はなく，あなたのほかに夫はない」

(29)　a.　弱形代名詞 (weak pronoun) + ヲ

比登豆麻等　安是可　曽乎　伊波牟　(MY 14 / 3472)
*pito.duma to aze ka so wo iwamu*
人妻　と　なぜQ　それを　いうのだろう
「人妻に触れるのをなぜそう戒めるのだろう」

b.　弱形代名詞 + ユ

保等登芸須　許由　奈伎　和多礼　(MY18.4035)
*Pototogisu koyu naki watare.*
ほととぎす　ここより 鳴いて 渡れ
「ほととぎすよ，ここを鳴いて過ぎよ」

c.　弱形代名詞 + モ

許母　布佐波受　弊都那美
*ko mo pusap-azu pye tu nami*
これも　似合ず　海辺 Gen 波
曽邇奴棄宇弖　(古事記歌謡 4)
*so ni nuki ute*
後ろに 脱ぎ捨て
「これも似合わない．波の引くように後ろに脱ぎ捨てて」

［強形代名詞 (strong pronouns)］

(30)　a.　強形代名詞 + ノ

奇母　神左備　居賀　許礼能
kususiku *mo* kamu*sabwi* woru *ka* kore no
不思議にも　神のように　振る舞い居る　これ Gen
水嶋　(MY 3472)
Midusima
出島
「神々しくあるのかこの水島」

b. 強形代名詞＋シ

保可尓 奈気加布 安礼之 可奈思母 (MY 3975)

*poka ni nagekapu are si kanasi mo*

離れた所に 嘆く 私 Foc 悲しい Excl

「離れて嘆く私が哀れです」

c. 強形代名詞＋ソ

古非米也等 母登奈於毛比此 安連曽

*kopwime ya to motona omopisi are so*

恋に苦しむQと もとなく思った 私 Foc

久夜思伎 (MY 3939)

*kuyasiki*

悔しい

「恋に苦しむこともないだろうと思った私が悔しい」

接語人称代名詞「ア・ワ・ナ・シ」の場合，「ガ・ヲ」の他に，「ハ」が後続する仮名表記の例はあるが，係助詞「モ・ソ(ゾ)・ヤ・カ」が後続する例はない．また，副助詞「サヘ・シ・スラ・ダニ・ナガラ・ノミ・バカリ・マデ」が後続する仮名表記の例も見あたらない.[7] これに対し (29c) に示すように，弱形指示代名詞が「モ」に接続する例はある．強形代名詞は (30) に示すように係助詞にも副助詞にも自由に接続する．

この分布の違いに，構造的説明を与えることも可能である．Cardinaletti and Starke のシステムでは，接語代名詞は機能範疇の主要部に付加される $X^0$ 範疇であるのに対して，弱形代名詞と強形代名詞はいずれも最大範疇である．接語代名詞は機能範疇の主要部に付加された位置にしか現れないという仮説により，その分布上の制限がある程度説明できる．しかし，接語代名詞に係助詞「ハ」が後続するのに同じ係助詞とされる「モ」が後続しないという事実は構造的な説明だけでは不十分である．

これに関して，Cardinaletti and Starke は興味深い指摘をしている．接語代名詞と弱形代名詞は対比的フォーカス (contrastive focus) を受けることができないと一般に言われているが，Cardinaletti and Starke (1999: 153) は次のフランス語の例をあげて，この一般化が間違っていると指摘している．

7. MY 13.3329 に「あ（1人称）のみかも」と読まれる「妾耳鴨」と「吾耳鴨」はあるが，仮名書きではない．



(31) a. *Jean LA voit.

ジャン 彼女（接語）見た

b. Jean voit ELLE.

ジャン 見た 彼女（強形）

c. A: Je te casserai la guele.

俺 君（接語）ぶち壊す ツラ

「俺は君のツラをぶち壊す」

B: Ah ouais? Tu veux dire que je TE casserai la guele!

ああそう 君 いいたいと 俺 君（接語） ぶち壊す ツラ

「ああそう？ 君は俺が君のツラをぶち壊すといいたいのだろう！」

(31) のような例を根拠に，Cardinaletti and Starke (1999: 154) は (32) に示す一般化を提案する．

(32) 対比的フォーカスが与えられた不完全人称代名詞には先行文脈に明確 (prominent) な先行詞がなければならない．(Deficient personal pronouns must have an antecedent prominent in the discourse; 1999: 154)

さて，(32) をふまえて，再び上代語の接語代名詞と弱形代名詞の違いを見てみる．(29c) で見たように，「コ」に「モ」が後続する例は古事記歌謡にあるが，先行文脈を補うと，この「コ」に先行詞があることがわかる．

(33) 阿遠岐美祁斯遠 麻都夫佐迩 登理與曾比 （古事記歌謡 4）

*awoki mikesi wo matubusa ni tori yosopi*

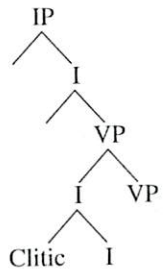
青い 御衣 を 十分に 取り装い

於岐都登理 牟那美流登岐　波多多蘖母　許母　布佐波受
*oki tu tori muna miru toki pa tatagi mo ko mo pusap-azu*
沖 Gen 鳥　胸見る時　羽ばたきも　これも　似合わない
「青い御衣を手落ちなく取り揃えて，沖の鳥が胸を見て羽ばたくように，これも似合わない」

上の例の「コ」(近称) は「青き御衣」という先行詞が先行文脈にある．これは「モ」で表示された弱形指示代名詞が文脈上に先行詞を持つ現象が，8 世紀の日本語にあったことを意味する．文献上，1・2 人称接語代名詞も同様の文脈で「モ」が後続する可能性もあるが，フランス語の (31c) のような対比的環境は，かなり特殊な談話場面でしか観察されない為，8 世紀の資料に見つからなくても不思議ではない．

係助詞が，接語人称代名詞と弱形指示代名詞に後続しない理由は (32) に示す文脈上の意味的制約の結果であると思われるが，その他の違いは構造的制約に由来する可能性が強い．Kayne (1991) によると，接語代名詞は (34) で示すように機能範疇である文の主要部に付加される．

(34)




Yanagida (2005b: 123) は上代語の接語代名詞と強形代名詞の分布の違いを指摘し，「ガ」など接語代名詞と共起する助詞は文の主要部であると提案した．[8] 接語代名詞は $X^0$ 範疇であり，文の主要部である「ガ」に付加するが，「ユ・ヨリ」などの後置詞に付加することはできない．表 (27) で示すように，上代語の「コ・ソ」などが後置詞と共起するという事実は「コ・ソ」などの代名詞は基本的に人称接語代名詞と異なり，最大範疇 XP であるという

8. Kayne (1994) に従い，Whitman (1999b) は日本語の助詞「ガ」が文の主要部をなす，いわゆる head-initial 仮説を提唱している．



Cardinaletti and Starke (1999) のの説を支持するものである．

しかし，人称接語代名詞「ア・ワ・ナ・シ」が後置詞に後続しないという一般化に対して例外に見える資料がある．Yanagida (2005b: 123) の調査では「万葉集」に接語代名詞「ナ」が格助詞「ニ」で表示する例が 3 例ある．すべて (35) に示すように「NP と（一緒だと）噂される」の意味の「NP に寄そる／寄さる」という表現で使われる．

(35) 刀奈布倍美　許曽　奈尓　与曽利鶏米　(MY 14 / 3468)
*tonapu be-mi koso na ni yosorime*
唱えるだろう-MI Focus あなたと 噂される
「唱えるだろうから，おまえと(一緒だと)噂される」

(35) に見られる「NP に寄そる」の「ニ」は，意味上与格または場所格の「ニ」ではなく，むしろ共格「ト」または名詞述語文の省略形「(私の彼は)あなただと噂される」のような機能に近い．助詞「ニ」がコピュラの連用形「ニ」に起源があるという説に従うと，この例文で使われる「ニ」はコピュラとしての意味的な役割を果たしていると見える．一方，「弱形代名詞＋ニ」の例は少ないが，以下の古事記の例は「ニ」が明らかに場所格の機能をもっている．[9]

(36) 麻用賀岐　許邇　加岐多礼　(古事記歌謡 42)
*mayu.gaki ko ni kaki tare*
「眉墨を　ここに書き垂らし」

接語代名詞が共格「ト」に後続する例がいくつかある．

(37) 奈里毛　奈良受毛　奈等　布多里波母　(MY 14.3492)
*nari mo narazu mo na to putari pa mo*
うまくいくかいかないかにもかかわらずおまえとは一緒だ」

9. 特に記紀歌謡以後の 8 世紀の資料には，弱形指示代名詞の「コ」と「ソ」は全体的にすくない．李 (2002) の計算では，上代歌謡に「コ」と「ソ」は全体で 14 例，「万葉集」に「コ」「ソ」「カ」は 42 例ある．「ココ」「ソコ」と「-レ」形の強形指示代名詞が上代歌謡に 5 例，万葉集には 140 例もある．この数字から，歴史上 8 世紀頃，弱形指示代名詞は強形指示代名詞に入れ替わりつつあったのではないかと推測される．

これらの例はすべて「ト」の副詞的用法，いわば連用修飾の構造に限られる．特に，8世紀の名詞句並列構造を代表する「NP と NP」に不完全代名詞が現れる仮名書きの例は存在しない．連用修飾の「ト」の起源もコピュラにあるという Frellesvig (2001) の説に従い，(37) の na to putari は後置詞句というより small clause と見るべきではないかと思われる．

Cardinaletti and Starke (1999) によると不完全代名詞は (38) に示す特徴がある．

(38) a. 不完全代名詞は一般名詞句と並列構造を構成しない．
(Deficient pronouns don't coordinate with lexical NPs.)
b. 不完全代名詞は連体修飾を受けない．
(Deficient pronouns don't allow c-modification.)

本節で見てきた上代語の代名詞の分布上の制約から，8世紀日本語において，接語代名詞と弱形代名詞は「不完全代名詞 (Deficient pronoun)」の特徴 (38a) を示している．一方，(39) に示すように，強形代名詞は一般名詞句と同様に並列構造を構成する．

(39) 伊毛止 安礼止… 天名 止利 不礼曽也 (催馬楽 43)
*imo to are to te na tori pure so ya*
妹と 吾と 手 Neg 取り 触れ Neg Q
「妻と俺と…手触れるよ」

最後に，不完全代名詞の (38b) に示す特徴について見てみる．関係節に修飾される強形代名詞の例は (40) にあるように容易に見つかるが，接語代名詞や弱形代名詞が関係節に修飾される例はない．

(40) 多妣由久 阿礼波 美都都 志努波牟 (MY 20 / 4327)
*tabi yuku are pa mitutu sinobamu*
「旅行くおれは（妻の絵を）見て偲ぼう」

上代語の強形代名詞は並列構造と連体修飾を許容する点において，現代語の (26) に示す「私」と「僕」に統語論的分布が似ている．しかし，上代語の強形代名詞は意味・語用論的に一般名詞とは異なるという事実を以下の節で取り上げる．



本節では，上代語における三分類の代名詞体系の類型論的特徴を見てきた．特に上代語には Cardinaletti and Starke (1999) による「不完全代名詞 (deficient pronoun)」と呼ばれる接語代名詞と弱形代名詞が存在する．これらの代名詞は分布上の制限，また統語的性質から明らかに一般名詞句とは異なると言える．

### 4.2 話者と聞き手指示

佐久間 (1936) は現代語では人称代名詞に一般名詞と捉えられるものが多いことを指摘している ((25a) 参照)．佐久間 (1936)，三上 (1955)，鈴木 (1973) などの観察によると，現代日本語には，話し手または聞き手を指すのに「お母さん」「先生」「課長」のように，一般名詞的表現がよく使われる．この点においては8世紀の日本語はどうだっただろうか．

上代語は平安時代の中古語と比較しても，話者を指す一般名詞的表現は見あたらない．1人称代名詞以外には話者を指す表現がないのである．平安時代になると「まろ」という男性の名称が1人称に使われるようになる．

(41) まろは，目は縦ざまに付き，眉は額ざまに生ひあがり…(枕草子)

上代にはこの用法はまだ発達していない (澤潟他 (1967: 693))．[10] 現代日本語では，話者である1人称を指す時に血縁名称や職名が使われることはよく知られている．

(42) お父さん／先生が見てあげるから…

上代語でも「父」「母」「兄」(せ) のような血縁名称が多く使われる．しかし，現代語と違って，話者がこれらの血縁名称を使って，自分を指す資料的事実は存在しない．同じように，職名や位名 (title) が話者の自己表示に使われることもない．「目上」の人が「目下」の人に「君」「大君」[臣]「すめらみこと」などと，自分を指して呼ぶ表現も存在しない．たとえば，例 (43) の古事記歌謡 42 は応神天皇が矢河枝姫から盞を受け取る時に歌った歌である．

10. 古事記歌謡 48 に「岐許志母知袁勢麻呂賀知」(聞こし持ち食せ，まろが父) という表現があり，「まろがちち」は普通「我々の父」と訳されるが，解釈は定かではない．

この歌では，話者は自分の行為を尊敬の助動詞「ス」を使って表現しているが，自己表示には接語1人称代名詞「ワ」が使われている．

(43)　酒久酒久登　和賀　伊麻勢婆夜…　阿波志斯
*sukusuku to wa ga imaseba ya apasisi*
ずんずんと　私が　いらっしゃると　出会う
袁登売　(古事記歌謡 42)
*wotomye*
乙女
「ずんずんと私が歩いて行くとね…出会った少女」

2人称については事情がもう少し複雑である．「君」「大君」のような職名(位名)や「妹」「妹子」のような血縁名称は聞き手を指すのに使われることはよく知られている．山田 (1954 / 1968: 94–97) が指摘している「称格に擬せられたるもの」はすべて聞き手を指す表現である．[11] この用法は現代語における，相手に向かって「先生」「お父さん」などと呼ぶ (44) の用法と一見同じように見える．

(44)　先生／お父さん，これを見て…

しかし上代語の用法を厳密に調べると，現代語とは明らかに異なる．上代語では聞き手を指す位名や血縁名称はすべて1人称の接頭代名詞と共起できる．(45) の左欄が「一般名詞表現」，右欄が「1人称所有格が付加された表現」である．

(45)

| 聞き手を指す一般名詞的表現 | 1人称所有格＋一般名詞 |
|---|---|
| 君，大君 | あぎ，あが君，我が大君 |
| 妹，妹子 | わぎも，わぎもこ |
| 汝兄（なせ） | 吾汝兄 |

11.　山田によると「称格に擬せられたるもの」に「まし」「いまし」「みまし」「きみ」「なむち」「わけ」「おれ」「い」がある．



(45) に示す1人称が付加された表現は聞き手を指す命令文にも使われる．

(46)　伊弖来　和技母児　安必　見而　由可武　(MY 14 / 3519)
*Ide ko wagimokwo api mite yukamu.*
出来　我妻　会い　見て　行こう
「出て来ておまえ（おまえのお母さんの）顔を見て帰ろう」

現代日本語では聞き手を指す普通名詞に1人称所有格を使うことはできない．

(47) #わたしの先生／わたしのお父さん，これを見て…

8世紀の日本語にみられる「聞き手を指す一般名詞的表現」に1人称の所有格代名詞を付加させた表現は英語やその他ヨーロッパ諸言語によく見られる用法に似ている．

佐久間と三上は英語などにおける (47) の用法に触れて，my lord あるいは Lord のような表現が聞き手を指す主語に使われる時でも，動詞は形態的に3人称に一致すると指摘している．上代語では，「君」や「我が背」が主語に使われた場合，その主語が「2人称」であるという証拠はない．日本の参考書では，このような文章に現代語訳を与える時，機械的に2人称主語を使う．例えば (48) に例をあげる．

(48)　多妣尓伊仁思　吉美志毛都芸（底）　伊米尓美由　(MY 17 / 3929)
*Tabi ni inisi kimi simo tugite ime ni miyu.*
旅に行った　君　Foc　続けて　夢に見える
安我加多孤悲乃　思氣家礼婆可聞
*A ga katakopi no sigekereba ka mo.*
私の片思い　が　度重なる　Q
「旅に出られたあなたが続けて夢に見えます．私の片思いが絶えないからでしょうか」　(現代語訳は小島他 (1994: 164))

(48) は大伴坂上郎女が家持に贈った歌だと言われているが，「あなた」が恋人である聞き手を指すような現代語訳になっている．主語「君」を「あなた」と訳すことによって主語が2人称と捉えられているが，原文が2人称であった証拠はまったくない．同様に，動詞は尊敬語の受け身「出られた」「見え

ます」「でしょうか」と訳されているが，これらに対応する形態素は原文には全く存在しない．訳者が敬語表現を使うなど，20世紀の女性像をもとにした現代語訳を与えることにより，8世紀の女性像を作りあげているのではないかと疑いたくなるが，いずれにしても，この歌の主語を2人称で捉えることは現代日本語に基づいた判断であり，8世紀の日本語を正確に反映していない．英訳すれば，3人称の訳は十分可能である．

(49)　My lord　has left on a journey but keeps appearing in my dreams.　Is it my unrequited love that just won't stop?

つまり，(48)に見られる一般名詞的表現が，談話の場面により聞き手をさすことは間違いないが，その表現が「2人称」だという根拠はない．実際に，この聞き手を指す一般名詞的表現のうち，血縁名称は2人称でなかった証拠が上代語の資料にある．

(48)に示した一般名詞的表現は，1人称接語代名詞だけでなく，2人称接語代名詞とも共起する．(50)を参照されたい．

(50)

| 聞き手を指す親戚名 | 2人称と共起する形 |
|---|---|
| 妹 | 汝妹（なにも） |
| (わが) 兄（子） | 汝兄（なせ） |
| (わが) 弟 | 汝弟（なおと） |
| (わが) 姉 | 汝姉（なね） |

(50)で示す用法は昔から注目されてきた．現代日本語には「お前妹」「あなた姉」のような表現はないので，この場合の「ナ」はもともと2人称ではなく，1人称代名詞であったという説もある（澤瀉他 (1967: 512)）．この説が正しいとすれば，(45)と同様に(50)も1人称代名詞＋普通名詞として捉えることができる．しかしこの仮説には少なくとも二つの問題がある．第一の問題は，(45)では「あがきみ」のように，所有格助詞「ガ」が必ず1人称代名詞に後続する．「吾妻」aduma のような化石化された表現も（*a＋Nga＋tuma＞*aNtuma＞aduma）の歴史的過程を経て，「吾が妻」が / aduma / に



なった．これに対して，(50)の2人称と共起する表現には，所有格の痕跡はない．（仮にそうした表現が存在するとしたら，*nagimo, *naze, *nago となるはずである．）第二の問題は，「1人称代名詞＋ガ＋名詞」の表現は，聞き手以外，発話場面にいない3人称を指すのにも使われることである．(51)にその例を示す．

(51)　多礼曽許能　屋能戸於曽夫流　尓布奈未尓　(MY 14 / 3460)
*Tare so kono ya no to osoburu nipunami ni*
誰 Foc　この　家 Gen 戸揺する　新嘗に
和我世乎　夜里弖　伊波布　許能 戸乎
*wa ga se wo yarite ipapu kono to wo.*
私 Gen 夫を　遣って　祈る　この戸 を
「誰だこの家の戸を揺するのは，新嘗めに私の夫を遣って忌みこもっているこの（家の）戸を」

これに対して，(50)の「ナ＋血縁名称」の表現は，聞き手を指す場面に限って使われる．同じ東歌の(52)は(51)と対照的である．

(52)　奈勢 能 古夜 ...　安乎祢思奈久与
*na se no kwo yo a wo ne si naku yo*
汝兄 Gen 子よ　私を音して泣かせるよ
伊久豆君麻弖尓　(MY 14 / 3458)
*iku.duku made ni*
息つくまでに
「わたしの夫よ ... 私を泣かせるよ　ため息が出るほどに」

必ず聞き手を指し，「ガ」などの所有格助詞を含まないということは「ナ＋血縁名称」に現れる「ナ」は所有格ではなく同格を意味すると言えるだろう．つまり(52)は(53)の英訳に対応する．

(53)　You, my husband
You make me cry out loud
Until the sobs catch in my throat

同格構造において，主語の人称は2人称になるので，「ナ＋普通名詞」が必

ず聞き手指示に使われることを説明できる．また，「ナ」が2人称を指すという分析により，「妹」(いも)「兄」(せ) の2人称的用法も説明できる．上代日本語にはゼロ代名詞 (pro) が存在したので，「妹」や「兄」が2人称的に使われる場合に，2人称代名詞「ナ」が同格構造から省略されていると考えられる．

以上，現代語の代名詞廃止論に対して，(54) に上代語の主な論点をまとめる．

(54)

| 代名詞廃止論（現代日本語） | 上代語 |
|---|---|
| a. 代名詞は名詞である | 代名詞と一般名詞の分布は異なる |
| b. コ・ソ・アの単独用法はない | コ・ソの単独用法はある |
| c. 人称代名詞の「人称」は定義しにくい | 話者指示の代名詞は1人称，聞き手指示の代名詞は2人称である |
| d. 自称と対称に職名・血縁名称を多く使う | 自称には使わない．対称には3人称か2人称同格を使う |

本節では，代名詞と一般名詞の違いについて述べた．現代語では談話参加者（1人称，2人称）を指すのに一般名詞が使われるが，上代語では，同じ場面で一般名詞が使われない．たとえ，表面的に使われているように見えても，現代語とは用法が異なる．日本語の代名詞を論じる研究では「話し手・聞き手指示」と「1人称・2人称」の区別をしない研究が多い．（そもそも，日本語の場合には「人称」という概念の存在さへ否定する研究が多い．）[12] しかし本稿の主張が正しければ，上代語では「談話参加者指示」と「人称」を区別する必要がある．「君」「わぎも」「我が背」のような表現が聞き手指示に使われる例は間違いなくあるが，それらの表現は2人称ではない．それに対して，「汝兄」「なにも」のような表現は聞き手指示であると同時に，2人称表現である．このように考えると，上代日本語では「人称」の概念は極めて重要である．1節で活格類型では Silverstein の「名詞階層」が形態的，統語的に重要な役割を示すことを述べた．代名詞の中でも1人称・2人称は3人称より高い階層に位置する．本節で見て来た上代語の代名詞に関する観察は名詞階層を反映する活格言語の特徴と一致するものである．

12. 金水 (1989) は現代日本語において「人称」は重要な概念であると指摘しているが，それは，語用論的意味における概念であり，西欧諸語の「人称」とは明らかに異なることを認めている．



## 5　公的自己，包括：除外と他称

前節では，現代日本語における「代名詞廃止論」に対して，上代日本語の人称代名詞が一般名詞から独立した範疇であること，代名詞の定義に「人称」は重要な概念であることを示した．本章では (25e–f) の論点を取り上げる．(25e) は3人称代名詞，(25f) は自称（1人称代名詞，再帰代名詞論）に関わる現象である．

### 5.1　1人称と公的自己

廣瀬 (1997) は日本語と英語の間にきわめて興味深い相違点があることを指摘している．それは，例えば，自分が非常に難しい，長年未解決の数学問題を解いたと仮定する場面で出てくる表現である．その場面において，(55) が英語の表現として最も自然である．

(55)　I'm a genius!

日本語においては「ぼく」や「わたし」を主語にたてるような表現ではなく，いわゆる再帰代名詞の「自分」を使った (56) の表現が自然である．

(56)　自分は天才だ．

(55)，(56) に基づいて，英語は1人称代名詞により「公的自己」とともに「私的自己」も表すのに対して，日本語は「ぼく」「わたし」は「公的自己」を表す役割に限られ，「私的自己」を表すのに「自分」を使わなければならな

い，というのが廣瀬の主張である．「自分」だけが（人称）代名詞で，その他の「ぼく」「わたし」「あなた」のような表現は人称代名詞としてはふさわしくないと解釈できるであろう．ただ，「自分」は「人称代名詞」と呼んでも，人称不定の人称代名詞である．

さて8世紀の日本語において「私的自己」と「公的自己」はどのように表現されたのであろうか．上代語の再帰代名詞は接語代名詞「おの」（己）と強形代名詞の「おのれ」があった．「おの」はやはり再帰代名詞が予測される環境に現れる．

(57)　春野 尓　　安佐留雉 乃　　妻戀尓
*Paru nwo ni*　*asaru kigisi no*　*tuma.gopi ni*
春野に　　あさる雉 Gen　　妻恋に
己 我當乎　　人尓　　令知管　　(MY 14 / 3458)
*ono ga atari wo*　*pito ni*　*sire tutu.*
自分 Gen 当たりを　人に　　知られている
「春の野で餌をあさる雉が妻恋いして自分の居場所を人に知られている」

「おの」が主語に立つことはまれで，接語代名詞である以上，終止形主文の主語に現れることはない．強形代名詞「おのれ」は文頭の定題（トピック）の位置に現れるし，話者指示と聞き手指示の機能を持っている（Whitman (1999a: 381–382)）．話者指示は古訓の例のみ（澤瀉他（1967: 153））で，聞き手指示は卑称なので，どちらも一般的な「私的自己」表現に使われたとは思えない．(55) の上代語訳を8世紀の話者に聞くことはできないが，やはり，(58) のように，1人称代名詞で表現したであろう．

(58)　a.　あれ天才なり．
　　b.　われ天才なり．

問題は (58a) と (58b) のどちらが選ばれるかということである．1人称代名詞の「ア」と「ワ」の違いに関して，先行研究を概略すれば，「ア」はより「単数的」「孤独的」，いわば「ウチ的」であるのに対して，「ワ」は「複数的」「公的」，いわば「ソト的」であると言われている．この違いの根拠として，澤瀉他（1967: 1）は「アガ」が所有格代名詞として選択する名詞と「ワガ」



が選択する名詞を対比して以下のようにまとめている．

(59)

| アガ | ワガ |
|---|---|
| 主，君，皇神（すめかみ），愛者（はしもの），妻（あづま），児，身，胸.面，恋，馬，為 | 背子，大君，妹，母，名，命，世，家，屋外，門，里，船，故 |

最近の研究では，松本（2008: 158）が「ア」と「ワ」の違いは除外代名詞と包括代名詞の対立に由来するという，注目に値する主張をしている（村山（1950）も参照）．第一節で紹介したように，除外形代名詞と包括形代名詞の対立は普通1人称複数代名詞に見られるが，1人称複数代名詞の除外形は聞き手を除外する（I and them but not you）のに対して，包括形は聞き手を含める（I and you and maybe them.）．除外・包括の対立は活格言語に際立って多いが，東南北アジアの言語にも多く存在する．

8世紀当時の文献では，強形代名詞「あれ」と「われ」は単数的な用法が普通なので，生産的な除外・包括の対立があったとすれば，8世紀以前に遡らなければならない．しかし，松本が指摘しているように，(59) に見られる所有関係で除外・包括の対立を説明することができる．「あが」が受ける「身」「心」「面」「恋」などはすべて個人の所有物で，聞き手と共有することはできないので，除外形の代名詞「ア」で所有関係を表す．一方，世（世代），家，里，船は共同体で所有するものである．「あが君」「あぎ」と「わが大君」の対立は特におもしろい．「あが君」とその省略形の「あぎ」は自分の主である君に向かって言うことが多いので，除外形を使うのが自然である．一方，「大君」は自分とは距離のある，貴い存在であり，話者も聞き手もその支配下にいる人間なので，包括形を使うのが自然である．

血縁名称は「あが」とも「わが」とも共起するが，よく見るとその両者の間に違いがあることがわかる．愛者（はしもの），妻，児は「あが」が受けるが，背子（兄子，せこ）妹，母は「わが」が受ける．愛者と妻は話者だけが所有するもので，聞き手と共有することはない．「子」は親同士で共有するが，結婚相手と話しているとき以外は包括形を使うはずがない．一方，「わが」が受ける兄，妹，母は家族制度のなかで定義される血縁関係で，家族メンバーがすべてその所有者である．「ア」と「ワ」が共起する次の歌でその違

いがはっきりとわかる．

(60)　和我　多妣波　比左思久　安良思　(MY 15 / 3667)
*Wa ga tabi fa pisasiku arasi*
我らが　旅は　長く　あるらしい
許能　安我　家流　伊毛我　許呂母能　阿可　都久
*kono a ga kyeru imo ga koromo no aka tuku*
この　私が　着ている　妻 Gen　衣　Gen 垢　付く
見礼婆
*mireba.*
見えれば
「我々の旅は長くなったようだ．この私が着ている妻の衣が垢がついたのを見ると」　(著者の訳)

上の歌は新羅に遣わせる使節団の一員が作った「遣新羅使人歌」である．この歌で，「ワ」と「ア」を使い分けていることは偶然だとは思えない．「旅」は同じ船に乗っている同僚の使節団員と共有するものなので，「わが旅」と包括形で表し，一方，妻の衣を着ているのは話者一人に限られるので，「あが着(け)る」と，除外形を使ったのだろう．包括形の「ワ」と除外形の「ア」の対立を考慮に入れると，多くの現代語訳ではどちらの代名詞も「私」と翻訳しているが、それでは物足りないことがこの例でわかる．

以上，「ア」と「ワ」の対立について簡単に述べてきたが，(55) の上代語訳に話をもどすと，どちらが適切であろうか．やはり廣瀬が言う「私的自己」の場面，例えば自分の部屋で，一人で，難解の問題を解いた場合，(58a) のように聞き手を除外する，単数的な，ウチ的なア系統代名詞を使って「あれ天才なり」と言うのが最も適切であろう．一方，(58b) の「われ天才なり」は自分の賢さを他者に向かって誇示する「公的自己」を表す話者指示の表現であると言えるであろう．

重要なことは「私的自己」を表す表現「あれ」も［公的自己］を表す「われ」も 1 人称代名詞であったことである．現代日本語ではこれらの概念は「人称」と無関係に表現されるが，8 世紀の日本語には「人称」は自己表現には不可欠な概念であったと思われる．



### 5.2　3 人称と指示代名詞

上代日本語には，文脈指示に限られる 3 人称代名詞の「シ」のほかに指示代名詞「コ」と「ソ」があった．橋本 (1966 / 1986) が指摘したように，上代語の指示代名詞体系は二次元的なものであった．いわゆる遠称の「カ」はまだ未発達で，万葉集には仮名書きの例は 3 つしかない (橋本 (1986: 210))．橋本によれば，「コ」が指示する領域は「話し手を包む空間」で，「ソ」は「その外部」の領域を指す．「ソ」には聞き手や聞き手に近いものを示す機能はまだないので，「中称」という範疇はふさわしくない．[13] 場所を指す「ソコ」でも，聞き手に近い場所ではなく，文脈に明示された場所を指すのに限られる．例えば，下の例では「ソコ」は先行文脈の「青山」を受けている．

(61)　青山乃　曽許　十方　不見　(MY 16 / 942)
Awo yama *no* *soko* to mo miyezu
青山　Gen　そこども　見えないで
白雲毛　千重 尓　成重来沼
sira kumwo mo tipye ni nari konu.
白雲も　幾重に　なって来た
「青山がそれだと分からず白雲も幾重に重なって来た」

橋本は「コ」が「話し手の感覚可能な領域」を指すのに対して，「ソ」は (話し手の)「感覚不能の対象」つまり「観念内部に存するもの」を指すという (1986: 219)．従って，実在する「もの」を指すよりも文脈指示，または抽象的な時間や「こと」を指す機能が「ソ」には多い．

上代語の指示代名詞体系の二次元性は現代日本語の三次元的な体系と対照的である．(現代日本語の指示詞に関する研究は金水・田窪 (1992) を参照されたい．) 一般的なウチ・ソト説の捉え方に従えば，現代語のコ・ソ・アの中で，「コ」と「ソ」が対をなす場合，「コ」がウチで「ソ」がソトとされる

13.　上代語の指示代名詞の詳細な調査により，李 (2002) も「ソ」系列と 2 人称代名詞の間の「積極的な関わり」がないという．李の調査によると，文脈の先行詞を受けず，聞き手の所有物をさす「ソ」の例は上代語の韻文資料には次の万葉集 2948 だけである．
(i)　明日者　其門将軍去　出而見与　恋有容儀　数知兼　(MY 20.2948)
この歌のほとんど全文が漢文で書かれていることを踏まえると，この「其」は漢文の影響を受けた用法である可能性がある．

が，対話場面の外にいる第三者と対照する場合，「コ」と「ソ」がともにウチとなり，ソトである「ア」と対を成す．このように，現代日本語に適用される「ウチ・ソト」の対立は話し手の遠近関係による相対的な概念であり，「人称」の役割は貧弱である．話し手は常に「ウチ」側にいるが，聞き手や場合によっては第三者が，話し手の視点により，「ウチ」に含まれたり「ソト」へ回されたりする．

一方，上代語では指示代名詞のみならず代名詞体系全体において，「人称」の区別は明確であり，「名詞階層」の役割が支配的である．指示代名詞体系に現代語に見られるような相対的な区別がない．たとえば，文脈指示の指示代名詞の場合に，現代語では「ソ」と「ア」の選択は指示対象が話し手と聞き手の間で共有されているか否かによって決まる．一方，上代語には「ア」に当たる「遠称」専用の代名詞「カ」はまだ未発達であり，文脈指示は主に「ソ」か「シ」が使われる．[14]「ソ」と「シ」の使い分けは名詞階層を反映する．上で述べたように，所有格助詞がある場合，「シ」は必ず「ガ」を取り，「ソ」はほとんどの場合に「ノ」を選択する．[15]「シガ」は必ず定名詞である人間か動植物の先行詞を受け，文法的機能としては所有者にも主語にもなる．それに対して，「ソノ」は人間の先行詞を受けず，主語にもならない．不活性主語を表すはずの「ソノ」は，3.2.1 節で紹介した接頭辞 sa- に交替されたと思われる．

(62)　婀拕羅斯枳　偉儺謎　能　陀倶彌　柯該志　（日本書紀歌謡 80）
*Atarasiki*　*winabye*　*no*　*takumi*　*kakesi*
新しい　偉那部の　工匠　かけた
須彌　儺嗇　旨我　那稽麼　拕例　柯々該武預
*sumi napa*　*si ga nakeba*　*tare ga kakemu yo*
墨　縄　彼がいなければ　誰が　かける Q
婀拕羅　須彌　儺嗇
*atarasiki*　*sumi*　*napa.*
新しい　墨　縄

14.「コ」の文脈指示の例もあるが，橋本 (1986: 214) が指摘するように，「ソ」に比べて際立って少ない．

15. 古事記歌謡 101 に「ソガ」が一例だけある．先行詞は植物である．



「偉那部の工匠が使っていた墨縄　彼がいなければ　誰がかけるだろう　新しい墨縄」

(63)　伊儺武斯盧　苕簸泝比　野儺擬　寐逗　（日本書紀歌謡 83）
*Inamusiro*　*kapasoi*　*yanagi*　*midu*
枕詞　川沿い　柳　水
喩凱麼　儺弭企於己陀智　曾能　泥播　宇世儒
*yukeba*　*nabiki okitati*　*sono*　*ne pa usezu.*
行けば　なびき起きあがり　その　根は　失せない
「(否むしろ)川沿いに生えている柳　水の行くままに　なびき起きあがり　その根は決して失せない」

以上，5 章では，上代日本語が現代語と類型学的に異なる代名詞体系をもっていたという資料的事実を示した．現代日本語の代名詞体系が「ウチ・ソト」による概念によって捉えられる現象であるのに対して，上代日本語は，「人称」の厳密な区別に基づく代名詞体系体系をもつ．1 人称の包括形と除外形の区別，指示代名詞の二極性，そして，名詞階層の支配的な役割が現代語との著しい相違点である．

## 6　結　論

本論文では，格助詞「ガ」と「ノ」の名詞階層による厳密な区別，接語代名詞や接頭代名詞接辞の存在，1 人称の包括形と除外形の区別など，上代日本語には，活格型言語に共通する特徴があることを示した．この特徴からわかることは，上代語は現代日本語とは類型の異なる言語であり，必ずしも現代語の延長線上で把握できない言語現象を多く示す．5 章では，上代語の代名詞体系が二次元的であり，その分布がウチ・ソトの対立よりも，名詞階層に支配されるという点で現代日本語と著しい違いがあることを示した．

古代の人々の言語生活に「視点」が，現代語及び一般の自然言語と同様に重要な役割を果たしていたことは疑う余地はない．その「視点」の働きを具体的に明らかにしようとする場合，まずその基盤となる言語の性質を明白にする必要がある．言語類型論から導かれた概念や一般化に基づき，今までと違う古代語の特徴を発見できる可能性は大いにあると思われる．

## 参考文献


Cardinaletti and Michael Starke (1999) "The Typology of Structural Deficiency: A Case Study of the Three Classes of Pronouns," *Clitics in the Languages of Europe*, ed. by Henk van Riemsdijk, 145-233, Mouton de Gruyter, Berlin.

Dahlstrom, Amy (1983) "Agent-Patient Languages and Split Case Marking System," *BLS* 9, 37-46.

Delancy, Scott (1986) "Relativization as Nominalization in Tibetan and Newari," ms., University of Oregon.

Dixon, R. M. W. (1979) "Ergativity," *Language* 55, 59-138.

Dixon, R. M. W (1994) *Ergativity*, Cambridge University Press, Cambridge.

Fortescue, Michael (1984) *West Greenlandic*, Croom Helm, London.

Frellesvig, Bjarke (2001) "A Common Korean and Japanese Copula," *Journal of East Asian Linguistics* 10, 1-35.

Frellesvig, Bjarke and John Whitman (2008) "Introduction," *Proto-Japanese*, ed. by Bjarke Frellesvig and John Whitman, 1-12, John Benjamins, Amsterdam.

Gildea, Spike (2000) "On the Genesis of the Verb Phrase in Cariban Languages: Diversity through Reanalysis," *Reconstructing Grammar*, ed. by Spike Gildea, 65-106, John Benjamins, Amsterdam.

Givón, Talmy (1988) "The Genitive as a Source of Nominative and Accusative Case Marking: Reconstruction in Ute and Uto-Aztecan," ms., University of Oregon.

Givón, Talmy (1991) "The Evolution of Dependent Clause Morpho-syntax in Biblical Hebrew," *Proceedings of the Symposium on Grammaticalization*, ed. by B. Heine and E. Traugott, John Benjamins, Amsterdam.

Haas, Mary (1941) "Tunica," *Handbook of American Indian Languages*, IV, ed. by Franz Boas, 9-143, Augustin, New York, Bureau of American Ethnology Bulletin 40,1, 159-204.

長谷川信子 (2007)「1人称の省略」『日本語の主文現象』長谷川信子(編), 31-369, ひつじ書房, 東京.

橋本四郎 (1966)「古代語の指示体系：上代を中心に」『国語国文』35-6, 329-341.

橋本四郎 (1986)『橋本四郎論文集』角川書店, 東京.

廣瀬幸生 (1997)「人を表すことばと照応」『指示と照応と否定』廣瀬幸生, 加賀信広(編), 研究社出版, 東京.





Hoji, Hajime (1990) "On the So-called Overt Pronouns in Japanese and Korean," *Papers from the Seventh International Conference on Korean Linguistics*, 61-78.

板橋義三 (1998)「アイヌ語の接辞 i / si と古代日本語の接辞, 名詞 i / si の同源性について」『比較社会文化』第4巻, 99-118, 九州大学.

Kayne, Richard (1991) "Romance Clitics, Verb Movement, and PRO," *Linguistic Inquiry* 22, 647-686.

Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge.

金水敏 (1989)「代名詞と人称」『講座日本語と日本語教育』北原保雄(編), 第4巻, 98-116, 明治書院, 東京.

金水敏・田窪行則 (1992)『指示詞』(日本語研究資料集1), ひつじ書房, 東京.

久野暲 (1978)『談話の文法』大修館書店, 東京.

Klimov, Georgij A. (1974) "On the Character of Languages of Active Typology," *Linguistics* 131, 11-25.

Klimov, Georgij A (1977) *Tipologija Jazykov Aktivnogo Stroja* (Typology of Active Languages), Nauka, Moscow.

小島憲之・木下正俊・東野治行之 (1994)『万葉集』(新編日本古典文学全集), 小学館, 東京.

Lahaussois, Aimee (2003) "Ergativity in Thulung Rai: A Shift in the Position of Pronominal Split," *Language Variation: Papers on Variation and Change in the Sinosphere and in the Indosphere in Honour of James A. Matisoff*, *Pacific Linguistics* 555, 101-112.

Malchukov, Andrej (2008) "Split Intransitivity, Experiencer Objects, and "Transimpersonal Constructions" (Re-)Establishing the Connection," *The Typology of Semantic Alignment*, ed. by Mark Donohue and Soren Wichmann, 76-100, Cambridge University Press, Cambridge.

松本克己 (2008)『世界言語のなかの日本語——日本語系統論の新たな地平』三省堂, 東京.

Meira, Sergio (2006) "Stative Verbs vs. Nouns in Sateré-Mawé and the Tupian Family," *What's in a Verb: Studies in the Verbal Morphology of the Languages of the Americas*, ed. by Graz'yna J. Rowicka and Eithne B. Carlin, 189-214, Lot Occasional series, Netherlands Graduate School of Linguistics.

三上章 (1955/1972)『現代語法』くろしお出版, 東京.

Mithun, Marianne (1991) "Active / agentive Case Marking and Its Motivations," *Language* 67.3, 510-546.

村山七郎 (1950)「古代日本語における代名詞」『言語研究』16, 40-47.

野村剛史 (1993)「上代語のノとガについて(上)」『国語国文』62, 1-17.
大野晋 (1977)「主格ガの成立(上・下)」『文学』44, 653-664; 45, 876-890.
澤瀉久孝他 (1967)『時代別国語辞典』三省堂，東京.
Reesink, Gerard (1987) *Structures and Their Functions in Usan, a Papuan Language of Papua New Guinea*, Studies in Language Companion Series 13, John Benjamins, Amsterdam.
李長波 (2002)『日本語の指示体系の歴史』京都大学出版，京都.
Roberts, John (1987) *Amele*, Croom Helm, London.
Sapir, Edward (1917) "Review of C.C Uhlenbeck: Het Passieve Karakter ...," *The Collected Works of Edward Sapir* V, ed. by W. Bright, 69-74 (1990), Mouton de Gruyter, Berlin and New York.
坂元宗和 (1999)「頻回を意味する副詞」『国学院雑誌』100.6, 17-31.
佐久間鼎 (1936/1983)『現代日本語の表現と語法』くろしお出版，東京.
Silverstein, M. (1976) "Hierarchy of Features and Ergativity," *Grammatical Categories of Australian Languages*, ed. by R. M. W. Dixon, Australian Institute of Aboriginal Studies, Linguistic Series, 22, Canberra.
鈴木孝夫 (1973)『言語と文化』(岩波新書)，岩波書店，東京.
Whitman, John (1999a) "Personal Pronoun Shift in Japanese: A Case Study in Lexical Change and Point of View," *Function and Structure: In Honor of Susumu Kuno*, ed. by A. Kamio and K. Takami, 357-386, John Benjamins, Amsterdam.
Whitman, John (1999b) "Kayne 1994: p. 143, fn. 3," *The Minimalist Parameter*, ed. by G. Alexandrova, 77-100, John Benjamins, Amsterdam.
山田孝雄 (1954)『奈良朝文法史』宝文堂，東京.
Yanagida, Yuko (2005a) "Ergativity and Bare Nominals in Early Old Japanese," Paper presented at Workshop on Theoretical East Asian Linguistics, Harvard University.
Yanagida, Yuko (2005b) *The Syntax of Focus and Wh-questions in Japanese*, Chapter 4, Case/focus Particles and Clause Structure Change: Evidence from Early Old Japanese, Hituzi Shobo, Tokyo.
柳田優子 (2007)「上代語の能格性について」『日本語の主文現象』長谷川信子(編)，147-188，ひつじ書房，東京.
Yanagida, Yuko and John Whitman (2009) "Alignment and Word Order in Old Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 18, 101-144.

John Whitman (Cornell University)
柳田優子 (筑波大学)

# 第III部

# 話法・時制現象

*Language Change*, Oxford University Press, 2008)

**柳田優子**（やなぎだ　ゆうこ）
1958年，埼玉県生まれ．筑波大学・教授．
主要業績：*The Syntax of Focus and Wh-Questions in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective*（ひつじ書房，2005），"Word Order and Clause Structure in Early Old Japanese"（*Journal of East Asian Linguistics* 15, 2006）

**山口治彦**（やまぐち　はるひこ）
1961年，大阪府生まれ．神戸市外国語大学・教授．
主要業績：『語りのレトリック』（海鳴社，1998年），『明晰な引用，しなやかな引用：話法の日英対照研究』（くろしお出版，2009）

**和田尚明**（わだ　なおあき）（編者）
1968年，大阪府生まれ．筑波大学・准教授．
主要業績：*Interpreting English Tenses: A Compositional Approach*（開拓社，2001），"The Present Progressive with Future Time Reference vs. *Be Going To*: Is Doc Brown Going Back to the Future Because He Is Going to Reconstruct It?"（*English Linguistics* 26-1, 2009）

**坪本篤朗**（つぼもと　あつろう）（編者）
1949年，大阪府生まれ．静岡県立大学・教授．
主要業績：『モダリティと発話行為』（赤塚紀子と共著）（研究社，1998），「〈部分〉と〈全体〉から見る日英語の接続」（『英語語法文法研究』15, 2008）

**中村芳久**（なかむら　よしひさ）
1951年，福岡県生まれ．金沢大学・教授．
主要業績：『認知文法論 II』（編著）（大修館書店，2004），「言語における主観性・客観性の認知メカニズム」（『言語』5月号，2006）

**木多　啓**（ほんだ　あきら）
1965年，埼玉県生まれ．神戸市外国語大学・准教授．
主要業績：『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』（東京大学出版会，2005），「他者にとっての環境の意味の知覚についての覚書」（『神戸外大論叢』58-6, 2007）

「内」と「外」の言語学　ISBN978-4-7589-2145-9　C3080

編　者　坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明
発行者　長沼芳子
印刷所　日之出印刷株式会社

2009年10月20日　第1版第1刷発行©

発行所　株式会社　開拓社
〒113-0023 東京都文京区向丘 1-5-2
電話　(03) 5842-8900（代表）
振替　00160-8-39587
http://www.kaitakusha.co.jp

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書(誌)を無断で複写複製(コピー)することは，著作権法上の例外を除き，禁じられています．
コピーされる場合は，事前に日本複写権センター(JRRC)の許諾を受けてください．
JRRC〈http://www.jrrc.co.jp　eメール：info@jrrc.or.jp　電話：03-3401-2382〉